

## ■ 書 評



### 精神病性うつ病 一病態の見立てと治療

コンラッド・M・シュワルツ,  
エドワード・ショーター 著  
上田 諭, 澤山恵波 訳  
星和書店 2013年1月  
336頁, 定価 3,990円

真正面から臨床を論じた本であると同時に、眩暈を起こさせる本である。1頁読み進むと、著者らの精神病性うつ病への見解、DSMと製薬資本に支配された現状への異議申し立ての的確さに、はたと膝を叩く。また1頁進むと、著者の物言いに、ここまで断定してよいのかと脳髓が揺らぐ。急上昇と急降下による酔いは最後まで続く。

著者はECT(電気痙攣療法)による精神病性うつ病の治療と精神薬理学の分野で貢献をしてきたシュワルツ(精神科医)と、医学史の専門家ショーターである。物言いの激しさがときに突出するのはおそらくシュワルツの叙述の部分である。ショーターが執筆したと思われる箇所は、俯瞰的に精神医学の流れを見る余裕ゆえか、芯はあるが比較的穏便である。

著書は、おもに「精神病性うつ病」の治療を扱っている。著者らは、まずうつを内因性とそうでないものに分ける。内因性のもはメランコリーとも呼ばれる。その症候で著者らが重視するのは、他覚的にも見てとられる制止である。また、そのときの患者の体験は「悲哀」ではなく「苦痛」であると言う。これに評者は条件つきにはあるが賛成である。その内因性のもものうち、妄想を伴ったりコタール化したりしているようなものが精神病性うつ病である。著者らは、DSMの大うつ病が内因性と非内因性を同じ1つの袋に投げ込んでしまったことを批判する。そして、内因性と非内因性、また内因性の中でも精神病性のもものとそうでないものとで有効な治療法は違うのに、そのことを十分考慮しない現状を批判する。

本書の白眉は、後半の、シュワルツ自身の工夫に富んだ精神病性うつ病の治療指針である。治療には緊急性を要すること(自殺の危険、身体消耗による死亡がある)、完全治癒を目指すべきでありまた目指すことができることが述べられる。重点の置かれる治療は、ECTである。本邦では、ECTを容易に施行できない場合が多いのが現状ではないかと思われるが、事情は米国でもさほど変わらないようである。その他、多彩な薬物療法プランと副作用への警告が論じられている。本邦で発売されていない薬の有効性が高く評価されており、日本の薬物使用可能性の現状が残念である。ただし、この薬物療法についての部分は、読者ご自身の経験と照らし合わせながら1つの提言として批判的に読んでいただきたい。

このように書くと「急降下」の方はどこかと訝られるかもしれないが、諸点がある。

たとえば著者ら(おそらくシュワルツ)は、不安障害、PTSDの概念をかなり雑駁に自身の議論に持ち込む。世に謂われる非定型うつ病は不安障害である、精神病性うつ病に罹患すること自体が非常に苦痛な体験であるから、その患者にはPTSDが併発して残存するといった叙述が、留保なく繰り返される。最後に付された薬物への説明は、不明な評者が知らなかった副作用まで列挙してあり勉強になったが、一部に、やはり著者らの独自の意見も含まれていると考えて読まない足るを掬われかねない叙述がある。症例を重視しているのはよいが、それぞれの記述が非常に短い。しかも、本邦では症状性精神病、非定型精神病ないし統合失調感情障害、老年期精神病などとされるだろうものがあっさり精神病性うつ病に組み入れられている。さらに、抗精神病薬への批判が苛烈である。統合失調症は誤った診断にもとづいて大量の抗精神病薬を処方し続けて生じた人工物だと言わんばかりの叙述があり、これは首肯しがたい。

なお、訳者には、多忙な臨床のかたわらで労苦の多い訳業をしてくださったことに感謝したい。

(津田 均)